

14. 深田町の祭り

川 村 智 子

- I はじめに
- II 神社について
- III 深田の祭り
- IV 考 察

I は じ め に

深田のムラの入り口に、白山神社が境内を構えている。普段は人の姿をそこで見かけることはほとんどなく、忘れ去られたかのようにひっそりとした様子が印象的である。ここから数百メートル西には「加賀百万石時代村」が1996年に新しく建設され、観光スポットとして、または歴史学習の場として人々がつどっている。こうした新しい動きと対照的に、神社では伝統的な祭りが毎年行われる。本稿では伝統という観点に注目しながら、深田の人々の祭りへの取り組みと、それに関する年齢、性別による役割分担的な集落の性格について概観し、社会の変化のなかにおいて、深田の住民が祭りという伝統文化についてどのような考えをもっているのか、述べていきたい。

II 神 社 に つ い て

深田町周辺の集落それぞれには神社があり、それは白山神社であることが多いが、深田にも白山神社が集落の北西に存在する。この節では、深田の神社について人々との関わりを交えながら説明していく。

1. 白山神社

神社は集落の人々から「お宮さん」と呼ばれ、深田の住民がその氏子である。神社がつくられた年代は不祥で、記録もなく言い伝えもない。現在の本殿が1920年に建設されたということはわかっているが、これが何代目の建物なのかだれも知る人はいない。主祭神も人々には知られておらず、また御神体は氏子総代でさえも見たことがないし、また見ることは許されないらしい。ある人は、これを白山の石だろうと言い、ある人は観音様の彫り物だろうと言う。祭りのときであっても御神体が披露されることはありえない。

現在の拝殿は1962年に建てられたもので、それまで境内の北東に位置していた本殿は、拝殿の建築に伴い移動された。この結果、現在の本殿は東向きだが、かつては南向きだったために深田の白山神社には南と東の2つの鳥居がある（図-1参照）。現在、本殿が建っている土地はかつて西出家の果樹園だった。ここで過去の、神社と西出家とのつながりを述べておこう。「昔、神

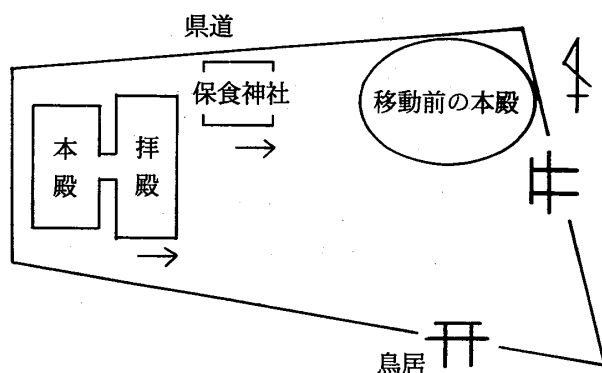


図-1 白山神社

社は西出の土地にあったようなものだった」と70歳代の男性は言っている。西出家は代々、氏子総代を務めていた時期があった。神社の管理は西出家の務めであったし、雨天の秋祭り際には西出家の屋内で獅子をまわした。神社と西出家の関係は深く、当時は「ニシテのかんさま（神様）」と呼ばれていたことからその関係は証明できるだろう（「ニシテ」とは西出家の屋号である）。

神社の管理者である氏子総代は3名で、任期3年、無償で奉仕する。選出は区長と役員の話し合いで決められ、任命という形をとっている。この任命という選出方法が始まったのは、1960年代半ばであり、それまでは代々西出家が務めていて氏子総代は1名のみだった。区の委員と氏子総代との関わりはないが、双方が集まって開く神社委員会が存在する。氏子総代の役割は主として祭りが行われるときにあり、神事への参加、祭りに先立つ本殿のお飾りがその主なものである。本殿にあがる資格は氏子総代と神主のみにあるもので、区長や役員であっても本殿にはあがることはできない。氏子総代の1人は、信仰心を大切にもってこの役をしているという。また、深田の白山神社の宮司は独立して存在しておらず、祭りの際に出張というかたちで、大聖寺八幡神社の宮司が深田白山神社の神主を務める。

境内の清掃は、以前は子供たちの仕事であったが、現在特に組織だてて当番を決めてやるということではなく、秋の大祭の前に草刈りなどを「秋祭り人夫」と呼ばれる「人夫」で行う。「人夫」というのは、集落単位の労働を指し、例えば草刈りや清掃があげられるが、1戸当たり1人の労働力の提供が義務づけられている。ここで強調したいことは、人夫で行う清掃は本殿を含んでいないということだ。前述のとおり、本殿にあがるには資格が必要でこれは集落内で氏子総代にのみ与えられるものであり、よって本殿の、清掃を含む祭りへの準備はすべて氏子総代が行う。また、この秋祭り人夫では境内に「大幟」を立てる作業もある。「大幟」は一端に竿を通した細長い布で、寺社の標識となるものであり、深田の大幟はかなりの大きさの旗なのだが、これを鳥居の前に2本立てる。しかし、この大幟は必ずしも毎年立てるものではなく、その年の収穫状況や災害の有無を考慮して立てるか否か決定される。1995年は立てられたが、大幟が立つというのは、喜ばしいことだと言う。

最後に神社と地区の経済的関係を述べる。神社にかかわる会計は2つあって、1つは区の会計に含まれる祭礼費である。これは祭りの際のお供え物や宮司への謝礼、直会の費用に使われる。もう1つは神社の基本金とよばれるもので、神社独自で決算される。使用目的は神社の維持管理一般で、たとえば1996年に本殿の外壁の張り替えに使われた。財源は、正月や祭りにおける賽銭、

寄付金である。寄付金は25歳男性の「五五の祝い」、42歳男性の「初老の祝い」、それと結婚に際して、集落の人々から神社に納められる。しかし、初老に関しては必ずしも現金で納めるのではなく、総代からの助言を受けて石灯籠などを42歳の男性が共同出費で納めることもある。

神社と人々の生活との距離は現在遠くなってきたが、25歳と42歳の男性が1月15日に神社に厄参りをしたり、神社への奉納の慣習が今も続いていることを考慮すると、両者の関係はまだ切り離すことはできないようである。しかし、人々が神社と関わる機会は日常の生活においてはほとんどないといってよい。

2. 保食神社

保食神社とは、豊受大神を祭った末社であり、豊受大神は衣食住の神で主に食物をつかさどり、伊勢神宮でも豊受大神を祭ってあるが、そこでは神嘗祭や新嘗祭が行われる。深田の保食神社は白山神社の一画に位置している。御神体は石で、もともと鏡池に沈んでいたが、“高いところへ”という枕神が立ったため笠伏山へ祭った。その後、白山神社に移されたものである。保食神社はこの辺りでは、深田のみにみられる。祭りの際は白山神社とならんで、神事が行われる。

保食神社は、1996年の加賀百万石時代村のオープンに伴う県道拡張のために境内の北側が削られ、これによって社が建てかえられた。

Ⅲ 深 田 の 祭 り

1. 深田の祭り

深田の祭りは年に4回ある。4回の祭りは春夏秋冬にそれぞれ1つずつあるが、一般のムラの人がふつう祭りと言えばそれは秋の大祭のことである。秋の大祭以外の祭りは神主、氏子総代、区長と班長ら委員のみで質素に執り行われるのに対して、大祭はムラの人が大勢参加する点が大きな違いであろう。

4つの祭りは表-1のとおりだが、大祭についてはⅢ-2で述べることにして、ここではその他の3つの祭りについて触れる。春祭り、オヌイタチ、新穀感謝祭の性格は同じでそれぞれ神主、氏子総代1名、区長と班長6名の計8名で神事のみ執り行われる。神事の内容は大祭と変わらな

表-1 現在行われている深田の祭り

	名 称	日 程	参 加 者	備 考
春	春 祭 り	3/15前後の日曜日	神主、氏子総代、役員	
夏	オヌイタチ	7/1後の日曜日	神主、氏子総代、役員	7/1 ; オヌイタチ=1年の半分の日
秋	大 祭	9/15・16	神主、氏子総代、役員 議員、JA支店長	獅子舞
冬	新穀感謝祭	12/8前後の日曜日	神主、氏子総代、役員	(昔) 山祭り

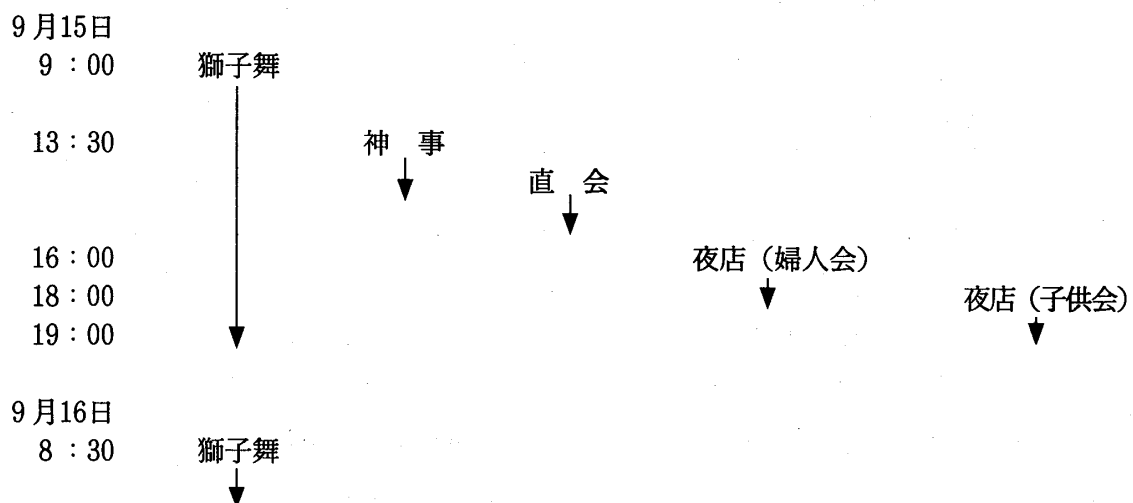
い。日程がすべて日曜日に設定されるところに、農業から通勤の会社員という生業形態の移り変わりへの対応がうかがわれる。「オヌイタチ」とは7月1日を指す言葉で、一年の真ん中の日であり、節目の日として祭りが行われる。新穀感謝祭は、以前は「山祭り」と呼んでいたこともあったが、後で述べる「カンジャ祭り」から変化していったもので、その年に収穫できた全ての米や野菜に感謝し、祭りをを行うものである。

現在行われている祭りのほかに、以前は存在していた2つの祭りの話を聞くことができた。1つは「カンジャ祭り」といって、12月8日がその祭日であった。カンジャとは鍛冶屋のことである。この日は各家ぼたもちをつくって神社へ供えたという。2つ目は「お地藏さん祭り」で、少年団（中学生）の男の子が夏休みに行っていた。深田の、祭りのお地藏さんは宮町から大聖寺よりの大通り沿いにあるが、現在は荒廃してしまっている。このお地藏さんに供えるお供えものを、子供たちが集落を1軒ずつもらいにまわる。加賀ではこの祭りはよく見られるもので、山中では今も大きく行われているようである。

2. 秋の大祭

大祭は深田で行われている祭りのなかで唯一住民から注目されているもので、大勢の人々が祭りへ参加することは既に述べた。そして、それはムラの人にとって神社と接する数少ない機会のうちのひとつである。ここではこの大祭を特に取り上げて考えていくことにする。

現在、大祭は9月15日であるが、1975年までは9月16日に行われていた。大祭の日程が変更されたのは、敬老の日が設けられてから数年経った1976年で、時代の変化に伴い、多くの人々がムラの外へ会社員として働きに行くようになったために、休日に祭りをする必要が感じられたからだという。大祭は9月15日となっているが、獅子舞が2日間にわたってまわり、実際は9月15日、16日の2日が秋祭りである。1995年の祭りの日程は次の通りである。



祭りには大きく分けて、神事、獅子舞、夜店の3つの要素があり、それぞれ独立している。次にこの3つの内容についてそれぞれ述べていきたい。

(1) 神 事

神事は白山神社と保食神社の両方に対して行われる。参加者は神主、氏子総代3名、委員6名、市議会議員、JA支店長、駐在員、獅子舞の代表者の計十数人で、そのほか参拝者として、年配の女性が数人と巫女舞を見に訪れた家族らが数人いる。神主は深田に常住しているのではなく、大聖寺八幡神社の宮司が出張してくるのだが、この辺りの祭りではたいてい神主は出張という形を取っていて、この宮司は9社で祭りを執行する。

神事は形式に則り終始厳かに執り行われる。式では御簾が上げられ御神体が姿を現すが、前述のとおり、御神体は見てはならないものであって、ここで人々が目にするのは鏡である。これは御神体の代わりで、その後ろの緞帳の奥に真の御神体があるらしいのだが、詳細は不明となっている。この鏡に祝詞をあげ、玉串を捧呈する。また、深田の白山神社には深田出身の、世界大戦の戦死者の霊も祭っており、祝詞をあげる。神への供物は、米、酒、塩、もち、魚、海菜、野菜、果物である。

式の終盤には巫女舞が披露される。巫女舞はふつう、区長により選出された小学4年生の女の子2名が担当するが、該当者なし、または4年時にできなかった子供がいる場合に限り5、6年生もその対象となる。巫女舞をするようになったのは最近の1991年のことで、神主により提案された。舞の指導は祭りの前日に2時間ほど神社にて神主から受けるようだ。この巫女舞は女性の祭りへの参加という点で、祭りの長い歴史における大きな変化だといってよいだろう。

保食神社に対しても祝詞、玉串捧呈ともに、白山神社と同様に執行され、御供え物も同じものが用意される。

神事の後は直会が区長宅で開かれ、神事の出席者が招かれる。

(2) 獅 子 舞

深田の獅子舞は獅子頭持ち、棒振り、囃しの3パートがあり男性のみで構成されていて、女性は一切参加しない。獅子舞を取り仕切るのは獅子舞保存会でこれに所属するのは30歳までの働く男性である。また、棒振りは小学3年の男の子、囃しは中学生の男の子に限られている。

毎年、獅子舞保存会が結成されて8月末の総会から祭りにむけて準備が始まる。例年9月に入ると、深田の旧保育所であった建物で獅子舞の練習をする。練習の内容や時間は経験を考慮してその年により異なるが、1995年の練習日程は9月8日から9月14日の午後8時から2時間程度であった。小、中学生は1時間で終わりそれぞれ帰宅する。練習は終始なごやかで、わんぱく盛りの子供たちをまとめる保存会の人達の姿がそこにあった。

祭り当日、朝から獅子舞がはじめられる。まわる順番は白山神社→鏡池→区長宅→その他の家となっていて、このとき各家をまわる順序は2通りで決められている。それは「外まわり」「内まわり」といい、外まわりとは、西出家を出発点として集落の外側から内側へ渦巻き状に進み、集落の中央にある木谷家が最後となるまわりかたであって、内まわりはその逆のまわり

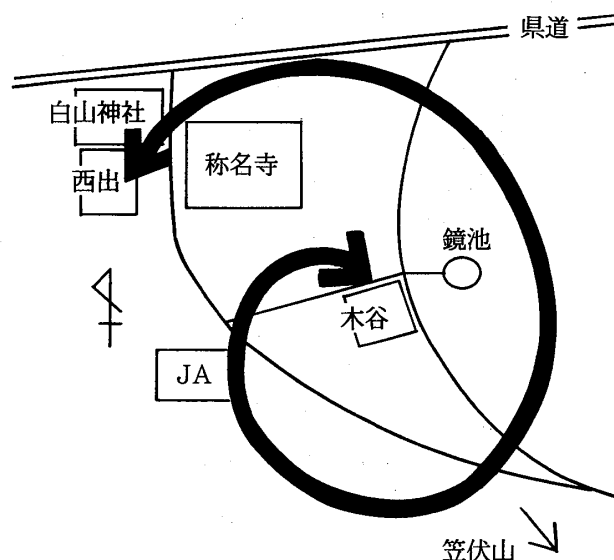
かたである（図－2 参照）。西出家は前述のとおり神社に関係のある家であり、木谷家は深田で最も大きな家の一つで有力者であった。しかし獅子舞の拠点になっている理由ははっきりしておらず、西出家は神社の隣だったから一番初めなのかもしれないという意見も聞かれた。外まわりと内まわりは1年おきの交替で、いつも後半になってしまう家がないようにという配慮である。また喪中の家では無事や豊作を願うといった行事としての祭りは行うが、獅子は舞わず、獅子舞の人たちから黙祷を捧げられることもある。9月16日、すなわち獅子舞の2日目にはムラの外でも獅子舞を行う。主な行き先は、橋立地区の公民館や深田の児童が通う小中学校などの公的機関、地域選出の議員宅である。その意義は、ムラ以外の通りすがりの人に深田の獅子舞を披露することにある。そしてもう一つ、「お山」に獅子舞をする。「お山」とは深田の南東に位置する笠伏山のことであるが、これは省略されてしまうことが多いらしい。

獅子は各家を決められた順番に従って進み、各々の家で祝儀である「ハナ」を受け取る。獅子は1軒で3回まわすのが一般であるが、ハナ代によってはさらにもう1回まわす。ハナは5000円くらいからで、ふつう7～8000円が多く、区長やオヤケリは1万円を、また区から6万円が納められる。集まったハナ代は祭りが終わると保存会のものとなり、労をねぎらうということで旅行などに使われる。

獅子が1軒につき数回まわすのに対して、棒振りはそのうちの1回だけ合わせられる。

棒ふりは獅子退治の踊りであり、家の入口を背にして獅子と向かい合って踊る。棒振りには、棒と刀があってそれぞれ2人ずつ4人で成り立っている。担当は小学3年生の男の子と決められており、毎年4人が区長から依頼される。しかし子供たちの数により、小学2年生が繰り上がってやったり、2年連続でやったりすることもめずらしいことではない。4人には祝儀として7000円が、保護者に渡される。また、たいていのこの辺りの祭りは9月に行われ、橋立地区の棒振りをする子供たちは、練習や本番の祭りのために学校を休むことが許されている。

獅子は、角のない雌獅子であるが、まわし方は男性的で激しい。これは黒崎と似ていて、おそらく昔一緒に習いに行ったためだろうと言う。ただし、黒崎の獅子舞には棒振りはつかない。獅子は激しいのに対して棒振りは単純である。しかし現在、獅子舞の形が崩れてきており、Nさんが獅子をまわしていたころはもっと厳しかったらしい。また囃しは、小太鼓や笛でにぎやかな橋立と比べて、深田は2～3人の笛のみの質素なものである。本来横笛なのだが今は横笛



図－2 獅子舞のまわり順

を吹くことは子供たちにとって難しいため、学校で習うソプラノリコーダーを使っている。

表-2 獅子舞に関する年齢集団の変遷

	青 年 団	自衛消防
1980年ころまで	～25歳	25～40歳
1980年くらい	40歳までに繰り上げ、自然消滅の形でおわった	～40歳
1990/91年	～30歳	30～40歳
1992年	保存会結成	

最後に獅子舞保存会について述べる。

これは1992年に初めて結成された組織で、その結成の経緯は表-2に示したような、それまで獅子舞を担ってきた年齢集団の変遷と無関係ではない。

1980年ころまでは、獅子舞は青年団の役割だったが、人不足により40歳までに繰り上げられたため、自衛消防に含

まれるかたちとなり、獅子は自衛消防がまわしていた。そして1990年または1991年に再び青年団と自衛消防が分かれて青年団の役割になったわけなのだが、この青年団において祭りのための組織が1992年に獅子舞保存会として名をあげ、現在まで獅子舞の運営を担当している。つまり獅子保存会とは、3回の変遷を歩んできた結果の、組織なのである。活動は祭りの時のみで、8月末に総会を開いて青年団員のうち希望者によってその年の保存会が生まれ、獅子舞の一切を取り仕切る。こういった組織で獅子舞を行うようになった目的は、深田の獅子舞という一つの伝統の保護であるが、自主的なものであって消滅の不安はいつもあると言う男性もいる。

(3) 夜 店

夜店は業者が出張してくるのではなく、深田の人で賄っていて、婦人会主催のものと子供会主催のものの2つがある。まず婦人会であるが、数年前までは夜店は出しておらず、カラオケ大会をひらいていたが、「毎年同じ人ばかり歌うだけだから」（婦人会の40歳代女性）という理由で取りやめになった。深田では、集落独自の婦人会は存在せず、JA橋立婦人部の深田という単位で「婦人会」が存在しているだけであるため、深田の「婦人会」でなにかをやろうという声があがり、祭りや運動会に力を入れるようになった。そういった背景のもとで、やきとり、わたがしなどを手作りの店で販売している。客は集落内外の子供が多く、子供連れのお年寄りの姿も見られた。売り上げは婦人会で使われる。

子供会の夜店は、小学6年生の女の子が準備し開店する。祭りに先だって各家から集めたおもちゃや人形などをバザーに出したり、くじやゲームを子供たちで作ったりしている。

以上、秋の大祭について神事、獅子舞、夜店の3つについて述べてきたわけであるが、これらは全て祭りの公的な側面であって、祭りにはもうひとつ家庭内的な側面も見ることができる。第一に、それは祭りのための食事となって表現される。祭りの日の食事は明らかに普段のそれとは異なる。深田ではこの日に赤飯とすしが、たいてい家で作られる。すしは、かきの葉ずしまたはいなりずしが一般的であるようだ。朝早くから家の女性たちによって作られた赤飯やすしは、午前中のうちに、結婚などによって深田を離れていった親族に配られる。またここに

は、先方が祭りの時には反対に受け取るという、互酬が成り立っている。第二に、客である。毎年9月15日は、里帰りで息子や娘とその家族が集まるため深田の人間の数は2倍、3倍にもなる。妻と母親の3人暮らしの60歳代男性は、娘が孫を連れて里帰りするのを楽しみにしているという。そして、夜には集まった大勢の人々で食事をするため、女性はこのためのご馳走も用意することになる。なお、ここで述べたことは秋の大祭における特徴であって、その他の祭りでは見られないことである。

IV 考 察

これまで神社と深田の祭りについて述べてきたが、ここから祭りにおける深田集落の役割分担的性格をうかがうことができる。特にそれは秋の大祭において顕著であり、神事、獅子舞、夜店の各要素は性別、年齢別にその役割が決まってくる。神事はムラで選ばれた特定の男性と巫女舞の少女たち、獅子舞は20歳代男性と小中学校の少年、夜店は「婦人会」の既婚女性と小学6年生の女の子と、各々毎年それに当てはまる者が担当しており、その分担は厳密性を帯びている。また公的側面あるいは宗教的側面が主に男性的であるのに対して、家庭内の祭りは女性抜きでは語れないものであるだろう。このような祭りにおける役割分担を促している要因は人々の伝統についての意識であると考えられる。

まず、神事に限定してみると、なぜ男性のみで執行されるのかという問いに対して、「宗教とか信仰にかかわってくるものだから」と答えが返ってきた。そしてさらに深く尋ねてみると、「ケガレ」観念について話す。封建的であった頃の社会制度を知る年配の男性は「昔は男女の差をつけたがった」と語りながら、女人禁制の領域や信仰について説明する。これより考察すると、出産や月経に伴うケガレ、つまり日本の民間信仰でいうところの「赤不浄」の観念がかつて深田においても存在していたといえるのではないか。出産、月経は女性特有のものであるから、ケガレの発生源としての女性そのものが神社の儀礼、すなわち「ハレ」の状態から排除される傾向があったのだろう。しかし、年配の男性たちは過去の男性優位の風潮を語りながらも現代は男女平等だとははっきりと述べている。にもかかわらず、女性を神事に取り込むことには、伝統の観点からやはり抵抗を感じるようである。反対に女性側も「女がやるものじゃない」といい、神事に参加することは考えていないようだ。

次に、獅子舞について言及するが、これも人々の伝統意識が現在もつづく役割分担に関係していると言うことができる。男性も女性も同様に、昔からそのようにやってきたことだからと答える。そしてさらに、伝統というものをはっきりとは意識していないと考えられる子供たちでさえも、「今までそうだったから」棒振りは男の子がやるもの、と捕らえているようだ。女の子は棒振りをやりたいとはあまり思わないらしく、その代わり現在は巫女舞が女の子の分担領域として定着しつつある。

祭りにおいて役割分担が顕著な深田であるが、その性格をさらに明確にするために、経済面や地区の運営における役割分担の傾向をここで述べる。経済面とは生業に関するもので、労働の領域は性別、年齢別に分かれている。以前盛んだった石工や大工は現代の高技術や機械化にのまれて減少したことで、深田の生業形態は変わり、町の外へ働きに出る男性が増加して今では会社員が多く、若い既婚女性はフルタイムもしくはパートタイムの労働をすることも現在普通である。そして、年配の男性が田んぼへ、年配の女性が畑へ出て農作業をするのが深田では一般にみられる光景となっている。地区の運営においては、性別で明確な違いを持つ。それぞれの役割については、第11章を参照してほしい。ひとつ述べておきたいのは、総会である。総会には集落の5～6割が参加し30人ほど集まるが、そのうち女性は数人である。総会の出席者は各世帯から1名となっているが、たいていは世帯主の男性で、女性が出席するのは彼らが都合の悪い場合の代打である。なるべく男性が出席するようにと決まっていて、札入れの際には「女は（総会に）よく出ている人に入れるだけ」であるため、好ましくないと考えられている。また発言権は男女平等だが、発言する女性はほとんどいないようだ。つまり、地区の総会は男性の領域なのである。以上のように、深田には役割が性別、年齢別に決定している要素が複数見られることから、役割分担的性格の濃い集落であるといえるのではないだろうか。

深田の役割分担的性格は祭りにおいて一番明確に現れてくるものだが、伝統的に分担されてきたその傾向も、時代の変化に伴って今変わりつつある。それは1991年から始められた巫女舞に見られ、これが祭りの活性化や神社への参拝者の増加が目的であるとしても、女性の儀礼参加は大きな変化の節目となるだろう。また、既婚女性も夜店を出すことで祭りに参加しはじめたといえる。このようなことの裏には、新しいものと古いものとの両面を文化として考え、深田の活性化を望む人々の心が存在しているのである。そして、深田の祭りは少しずつその様子を変えてきてはいるが、伝統を残したいという住民の気持ちはやはり強いものであり、実際彼らの話の中で伝統という言葉は何度も聞かれた。特に年配の方にとって伝統意識は強く、また働き盛りの男性であっても同様である。40歳代のある男性は「独身の頃は何げなく祭りに参加していたが、結婚して子供ができてからは子供たちのために（伝統行事を）残して、伝えていきたいと思うようになった」と言う。女性たちが伝統という言葉をおくのを、多くは聞かれなかったが、ある50歳代の女性は「笠伏山への獅子舞は伝統だから省略しないでやり続けてほしい」と言っているなど、祭りに対する伝統的な考えは男性と同様にあるといえる。祭りは神社が深田にできたころから行っていたと推測できるものであって、その主となる神事は秋の大祭のみでなく、すべての祭りにおいて深田の伝統行事として当たり前のものになっている。それに加えて、「祭りのイベントとして後に行うようになったのだろう」と言いながら、獅子舞や棒振り、大織にもまた特別な伝統意識をもっている。深田の人が言うところの「伝統」には、これらの有形のものや行事のほかに、深田住民の文化に親しむ心そのものを感じた。

深田は「文化の中心」²⁾だったという誇りがあり、文化としての伝統行事を残すための努力が必要だという声も聞くことができた。この伝統文化への強い意識を具体化するために、一つの方法として獅子舞保存会の有効利用が考えられる。現在その活動は大祭での獅子舞に限られているが、このような組織をもつことは大変に貴重なことなのであるから、次世代への獅子舞の伝達や深田の文化のアピールなどもめざしてその活動機会を増やしていくことが、伝統文化の維持と深田の発展につながるのではないだろうか。

注

1)「オヤケ」とは一等級および二等級の家のこと。詳細は第11章を参照。

2) 深田は1930年1月1日以前は、黒崎村字深田であった。

1886. 4. 1 黒崎村(黒崎、深田、片野、宮、高尾、田尻)

1930. 1. 1 黒崎村は橋立村(橋立、小塩)と合併

1952. 6. 10 町制施行→橋立町

1958. 1. 1 市制施行→加賀市として他の町とともにまとめられる

1886年から1929年まで、黒崎村の役場は現在深田にあるJA 加賀市橋立支所の場所にあり、農協、駐在所も深田に存在していたことから、深田は黒崎村の「文化の中心」とされていたと、地区の人々はいう。